

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 9 月 18 日現在

機関番号：32689

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720273

研究課題名(和文) 共通語としての英語の会話分析に基づくコミュニケーション能力モデルの提案と教育提言

研究課題名(英文) A Conversation Analytic Investigation of English as a Lingua Franca Communication: A Suggestion for the Model of Communicative Capability and Pedagogical Implications

研究代表者

小中原 麻友 (Konakahara, Mayu)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・その他

研究者番号：80580703

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,600,000円

研究成果の概要(和文)：「共通語」としての英語での実際のコミュニケーションを、英国の大学で学ぶ留学生同士の会話を例に、その相互作用の過程を詳細に分析した結果、会話者らが相手のフェイス(面子)を脅かしかねない言語行為時においても、多様な言語・非言語的手段を駆使して効果的に相互理解と人間関係の維持・構築を達成している過程が明らかになった。これに基づき、コミュニケーション能力を批判的に検討し、今後の英語教育への提案を行った。

研究成果の概要(英文)：The present research investigated how users of English as a lingua franca (ELF) from diverse lingua-cultural backgrounds achieve mutual understanding and develop interpersonal relationships while communicating in English, using a conversation analytic approach and pragmatic theories of communication. It examined audio- and video-recorded ELF casual communication of international students studying at British universities. Given the paucity of research into competitive aspects of ELF interactions, this research particularly focused on the interactional management of face-threatening acts naturally occurred in the data. It has been found that ELF users are communicatively capable of adjusting the use of various verbal and nonverbal resources according to communicative needs at hand even at the face-threatening moments in interactions. Based on the findings, the notion of communicative competence was reconsidered, and a suggestion for English language teaching was provided.

研究分野：語用論

キーワード：共通語としての英語 会話分析 コミュニケーション能力 談話・語用論的特徴

### 1. 研究開始当初の背景

グローバル化と共に国際的なコミュニケーションの場で、多様な言語・文化的背景を持つ者同士で「共通語」として英語を使用する機会が益々増えている。しかし、このような現実とは裏腹に、日本を含む各国の英語教育は、依然として、いわゆる英語母語話者の「英語」、及びそのコミュニケーションを規範として行われる傾向にある。世界の英語 (World Englishes) の研究分野で報告されている (e.g., Kirkpatrick, 2007)、自らの国や地域の社会・文化的側面を反映したアクセントや言語使用は、「誤り」として捉えられ、実際にはその定義が非常に困難であるにも関わらず、英語母語話者の「英語」(例：アメリカ英語やイギリス英語)のみが「正当な英語」として認識されている。これは、英語使用の現実と大幅にかけ離れているだけでなく、英語使用者の 80% を占める英語非母語話者 (Crystal, 2003) のアイデンティティに対する配慮に欠けている。急激なグローバル化に対応した英語教育を行うには、英語使用の実態を正確に把握し、グローバル社会に求められる「コミュニケーション能力」について批判的に検討することが急務である。

一方、共通語としての英語 (English as a lingua franca, 以下 ELF) の研究分野、特に語用論の記述研究では、高等教育やビジネスの現場、私的な場での実際の ELF のコミュニケーションの録音調査が進んでいる。その結果、その言語形式が「非標準的」であるにも関わらず、ELF のコミュニケーションが成功裏に達成されているその過程が徐々に明らかにされてきた (Firth, 1996; House, 2002; Meierkord, 2000 等)。しかし、ELF のコミュニケーションの実態を正確に把握するには、より多くの調査が必須である。また、ELF 使用者のアイデンティティに関する調査が、主に音声的特徴のレベルで実施されており (Jenkins, 2007)、談話・語用論的特徴のレベルではまだ十分に調査されていないことを考慮すると、この点についても調査をする必要がある。

### 2. 研究の目的

上述のような社会的背景を受け、本研究では、グローバル化と共に益々増加傾向にある ELF のコミュニケーションを、(1) その談話・語用論的特徴、及び (2) 会話の中での ELF 使用者のアイデンティティの交渉・形成過程の 2 つの側面に焦点を当てて調査することにより、ELF の正当性 (legitimacy) を検証し、また、その調査結果に基づき、ELF のコミュニケーションで求められる英語の「コミュニケーション能力」について批判的に検討することを目指す。更には、今後の英語教育に本研究の成果を取り入れる方法についても、その可能性を探ることを目指す。

但し、研究を進めて行く過程で、本研究の目的を達成するには、(1) の談話・語用論的

側面をより正確に把握する優先度が高いと判断し、(2) については今後の研究課題とすることとした。よって、結果として、(1) の側面を精査することにより、当初の研究目的を達成することを目指した。

### 3. 研究の方法

上述の目的達成のために、本研究では、ELF の使用が顕著である英国の大学で学ぶ留学生同士の実際の会話を収録・分析した。談話・語用論的特徴として、特に、会話データ中に自然発生した 3 種類の「フェイス」(顔、面目あるいは面子) を脅かす恐れのある言語行為 (face-threatening acts, 以下 FTAs)、すなわち、(1) 対話者との発言と重複しつつ相手から発言権を取る発言の重なり、(2) 相手の発言に非同意を示す行為、そして、(3) 対話者以外の第三者に対しての不平不満を述べるやり取りに焦点を当て (理由については後述) 相互作用の中でそれら FTAs がどのように行われているかの詳細な質的分析を行った。分析には、会話分析的手法 (Sacks, Schegloff, & Jefferson, 1974)、及び語用論的視点からのコミュニケーション理論 (Brown & Levinson, 1987; Grice, 1975) を用い、言語・非言語的手段が ELF のコミュニケーションでどのように使用され、かつどのような機能を果たしているかについて詳細に検討した。

研究開始当初、会話データの収集方法として、英語を ELF として使用する日本にいる大学生、及びビジネスピープルを対象としたフォーカス・グループ・ディスカッションの形式を採用することを検討していた。しかし、実施に当たり、日本において日本人以外の ELF 使用者を被験者として確保することが困難であったこと、また、これに関連して、日本において日本人同士が「英語」を共通語として意思疎通を図るのが不自然であるという問題点が浮上した。これらを受け、録音調査の実施場所を ELF の使用が顕著である英国の大学に、被験者を様々な言語・文化的背景出身の留学生に修正した。また、予備的調査でフォーカス・グループ・ディスカッションの形式を採用してデータ収集・分析を行った結果、ELF のコミュニケーションの実態をより正確に把握するには、「ディスカッション」という特殊な状況下での会話ではなく、ELF 使用者の「普段の会話」を調査する必要があることが明らかになった。これに伴い、データ収集方法を、(a) 調査がなくても自然に発生したと思われる普段の会話、あるいは (b) トピックを予め決めず自由に話して貰う自由会話形式を採用した会話に切り替えた。2 つの選択肢を用意したのは、(a) の収録の可能性を探ると同時に、データ収集率を上げるためであった。(a)、(b) の選択は被験者に委ねたが、多くの被験者が (b) を選択した。

次に、会話データの収集手順等について詳述する。データ収集は、4 つの英国の大学で

実施し、英語を母語としない留学生を対象とした。筆者の知人、及びその友人らの協力を得て、最終的に、日本を含む 14 の異なる言語・文化的背景出身の留学生 30 名が、被験者として会話データ収録に参加した。データ収集方法としては、前述の通り、多くの被験者が自由会話形式での会話の収録を選択し、本調査のために、2~4 名の友人同士で集まって自由に話をしたり、一緒に昼食を取ったりした。収録には、ボイスレコーダー(2つ)とビデオカメラ(1台)を使用し、被験者への負担を軽減するために、それら機材の操作は筆者が行った(ten Have, 2007)。合計 10 セットの友人同士の会話を録音・録画(但し、そのうち 2 セットは被験者の申出により録音のみ)収録した。各会話は、30~50 分程度であり、合計 7 時間 25 分のデータを収集した。被験者の言語・文化的背景や英語使用に関する経験を調査するアンケートも補足的に実施したが、これらは主に会話データの取りまとめに使用した。

次に、会話データの分析方法について詳述する。収録した会話データは、その 95%を、会話分析的手法を用いて文字起こしした(Hepburn & Bolden, 2013)。文字起こしを迅速に進めるため、会話分析的手法を用いた文字起こしのサービスを提供する英国の業者にも一部依頼したが、文字起こししたもの(トランスクリプト)は全て、録音・録画データを繰り返し聞きながら筆者が確認し、文字起こしには細心の注意を払った。

また、会話データのより多面・多角的分析をするため、会話分析的手法の他にも、談話分析的手法等、他の分析手法を一部取り入れることを検討した。しかし、最終的には、会話データの大部分を、社会学のエスノメソドロジー(Garfinkel, 1967)を起源とする会話分析的手法を用いて分析した。これは、言語使用者が「意味創出の為に言語の知識を資源として使用」かつ「解釈」する能力である「コミュニケーション能力」(Widdowson, 1983, p. 25)の定義とも一貫性があり、最も適した分析方法であると言える。

また、データ分析を進める過程で、発話の重なりや声の調子、強調や間等の言葉による行動だけでなく、視線行動(e.g., Goodwin, 1979)やジェスチャー(McNeill, 1997; Schegloff, 1984)、表情や姿勢(Heath, 1986)等の言葉によらない行動も相互作用上の意味交渉過程において重要な役割を果たしていることが確認された。これに伴い、非言語的手段についても、分析対象である言語現象に密接に関連しているものに限って、綿密な質的分析を行い、本調査研究の信頼性と妥当性の向上を図った。

更には、コミュニケーションが社会的行為であり、対話者に情報を伝えて相互理解を図る「情報伝達機能」と対話者に社会的関係と個人的な考え等を伝えて人間関係を構築・維持する「相互作用的功能」を持つことに基づ

き(Brown & Yule, 1983)、語用論的視点からのコミュニケーション理論、特に、グライスの協調の原理(Grice, 1975)とブラウンとレビンソンのポライトネス理論(Brown & Levinson, 1987)も取り入れ、考察の深化を図った。

以上、研究方法について詳述したが、次の項では、本調査研究の成果について、まずは、ELF の既存研究の検討・論評によって洗い出された研究分野の空白(a research gap)を明確にした上で、会話データの分析調査によって明らかになった点について報告する。

#### 4. 研究成果

ELF 研究は、ヨーロッパやアジアにおけるビジネスや高等教育の現場での実際のコミュニケーションの収録・分析により、その実態把握が行われてきた。その結果、ELF 使用者は、言語・文化的背景を異にする者同士だからこそ、相互理解を当然のこととせず、多様な言語的手段をコミュニケーション方略(strategy)として巧みに使用して、相互理解、及び人間関係の維持・構築を成功裏に達成している、その過程が明らかになってきた(e.g., Cogo & Dewey, 2012; Firth, 1996; House, 1999; Mauranen, 2006)。これらの調査結果を受け、ELF のコミュニケーションは「合意志向的、協力的、かつ相互支援的である」(Seidlhofer, 2001, p. 143)としばしば言われるが、常にそのような傾向を示す訳ではない。他言語でのコミュニケーション同様、ELF のコミュニケーションでも言語使用は状況に応じて適宜調整され、時には、コミュニケーション上の目的達成の為に、競争的な態度が示されることが報告されている(e.g., Knapp, 2002)。

既存研究の調査結果を、「コミュニケーション方略」という視点からまとめると図 1 のようになる。

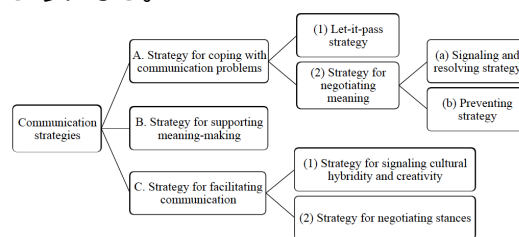


図 1. ELF のコミュニケーションで使用されているコミュニケーション方略の種類 (Cogo, 2009; Cogo & Dewey, 2012; Firth, 1996; Mauranen, 2006; Seidlhofer, 2009a; Wolfartsberger, 2011 等の既存研究の調査結果に基づく)

図が示すように、ELF で使用されているコミュニケーション方略は、便宜上、A. コミュニケーション上の問題に対処するための方略(strategy for coping with communication problems)、B. 意味創出を支援するための方略(strategy for supporting meaning-making)、そして C. コミュニケーションを促進するための方略(strategy for facilitating communication)の 3 つに分けることができる。A の方略は、(1) 意味理解の阻害にならない場合は「非標準的」な言語使

用を大目に見る方略 (let-it-pass strategy)、(2) 意味交渉のための方略 (strategy for negotiating meaning) から成り、後者は更に、(a) コミュニケーション上の問題が実際に起きたことを示し、それを解決する方略 (signaling and resolving strategy) と (b) コミュニケーション上の問題を事前に防ぐための方略 (preventing strategy) から成る。(a) の方略には、問題解明のための質問や発音の調整、繰り返しや言い換え等の言語的手段が含まれ、(b) には、確認のための質問や対話者の発話の補完、発話の自己修正や言い換え等が含まれる。一方、B の方略は、主に聞き手として話し手を支援するための方略であり、相づちや短い返答、対話者の発話の繰り返しや言い換え等の言語的手段が含まれる。また、C の方略は、(1) 文化的混種性や創造性を示すための方略 (strategy for signaling cultural hybridity and creativity) と (2) 自らの立場を交渉するための方略 (strategy for negotiating stances) の 2 つから成り、前者の言語的手段としては、コード切り替えや「非標準的」語法の創造的使用等、後者としては、対話者へ非協力的な態度や非同意を示す言語行動等が含まれる。

ELF の既存研究の検討・論評により明らかになったのは、ELF のコミュニケーションの合意志的、協力的、そして相互支援的側面を強調する調査結果が多い一方、その競争的側面、つまり、自らの立場を交渉するための方略 (図 1 の C2) についてはまだあまり多くのことが分かっていないという点である。しかし、予め決められた特定の現象を観察することを目的としないという会話分析的手法に則って (unmotivated looking; Sacks, 1984) 本研究データを概観すると、会話参加者らは、相互作用において、時折、互いに競争的な態度を示すことがあり、これは特に、会話データ中に自然発生した 3 種類のフェイスを脅かす恐れのある言語行為 (FTAs)、すなわち、(1) 対話者の発言と重複しつつ相手から発言権を取る発話の重なり、(2) 非同意を示す行為、そして (3) 第三者に対しての不満を述べるやり取り、に観察された。よって、本研究では、この 3 つの現象に焦点を当て、研究分野の空白である ELF のコミュニケーションにおける競争的側面、すなわち、ELF 使用者が自らの立場を交渉する過程を精査することとした。以下に 3 種類の FTAs ごとに分析結果を報告し、最後に本研究の教育的示唆、及び今後の展望・課題を提示する。

#### (1) 対話者の発言と重複しつつ相手から発言権を取る発話の重なり分析結果

本会話データ中に発生した発話の重なり (overlapping) のうち、その時点の話し手より会話の発言権を取る発話の重なりとそれに失敗したものを分析調査した。この 2 種類の発話の重なりを、更に疑問文と平叙文の形

式を取るものに分け、会話分析的手法及びコミュニケーション理論に基づく視座から、これら発話の重なり相互作用の中での発生場所とその機能について検討した。その結果、発話の重なりが発生した際、会話者らは潜在的 FTA である発話の重なりが侵害行為にならないよう、互いに調整し合って発言権を交渉していることが判明した。

例えば、発言権を取ることに成功した発話の重なりは、話者交替の起こり得る話者交替適切場所において、その時点の話し手が繰り返しを多く用いている際に発生していることが明らかになった。次の話者が、発話の重なりによって会話を前に進めたり相互理解を深めたりする一方、その時点の話し手は、発話の重なりを侵害行為として扱うことなく、発言権を次第に相手に譲渡することで、会話を相互作用的に円滑に進めていることが判明した。

また、発言権を取ることに失敗した発話の重なりは、話者交替適切場所において、その時点の話し手が自分の発話に新たな情報を追加している際にも発生していることが分かった。しかし、その場合も次の話者は、素早く聞き手に回ったり、適宜自分が言おうとした発話内容を修復したりすることで会話の話題の進展に巧みに貢献していることが明らかになった。

これらの分析結果は、相互作用の中の競争的な瞬間においても、ELF 使用者である会話者らが、相互理解と人間関係維持の為に、互いに発言権の交渉を上手く融通し合って会話を円滑に進めていることを示している。

#### (2) 対話者に非同意を示す行為の分析結果

本会話データ中に発生した話者が対話者に対して非賛同を示す行為について、会話分析的手法、及びコミュニケーション理論の視点を用いて分析調査した。その結果、会話者らは、非同意を示すための方略をコミュニケーション上の目的に合わせて巧みに調節していることが明らかになった。

例えば、非同意を示すこと自体が構造的には優先されない場合であっても (Pomerantz, 1984)、対話者の発話に対して異なる情報を提供する場合は、相手に自分が正しいと思う情報を示すコミュニケーション上の目的を優先し、緩和表現を用いることなく直接的かつ明確に非同意を示すことが分かった。これは、話者がグライスの協調の原理の質の公理 (Grice, 1975) に基づき、相互理解を達成するために真実を伝えることを優先し、積極的に会話に貢献していることを示している。

一方、対話者の評価とは異なる意見を伝える場合は、非同意の優先構造に沿って、遅れや緩和表現を伴って非同意が示され、対話者の自己卑下的発話に対して肯定的な意見を伝える場合は、それらを伴うことなく即座に反対の意が示されることも明らかになった。これは、話者が非同意というフェイスを脅か

す恐れのある言語行為の度合いを和らげることによって、相互作用における人間関係の維持を確実にしていることを示している。

このように、ELF 使用者は、相互作用の中の非同意を示すようなフェイスを脅かす恐れのある言語行為時において、相互理解と人間関係の維持のために、適宜、その方略の使用を巧みに調節していることが判明した。

### (3) 対話者以外の第三者に対しての不平不満を述べるやり取りの分析結果

本会話データ中に発生した対話者ではない第三者に対しての不平不満を述べるやり取りを分析調査した。分析には、コミュニケーション理論からの視座と会話分析の単一事例分析の手法を用い、この種のやり取りにおいて、どのような言語・非言語的手段がどのような機能を果たしているかについて精査した。その結果、会話者らは、自らが参加する会話の文脈に適切となるよう、複雑、かつ動的にフェイスの交渉をしていることが明らかになった。

例えば、第三者に対しての不平不満は、通常、長いやり取りに発展することが多いが、その場合、参加者らは不平不満の妥当性を段階的に交渉している。不平不満に賛同しない参加者は、その妥当性を評価する為に必要な更なる情報を質問で引き出すことにより会話に参加し、対話者と第三者のフェイスを侵害することを防いでいる。一方、不平不満を言い出した者やそれに賛同する者は、“oh”等の反応叫び(response cry; Goffman, 1981)や直接・間接話法(Holt & Clift, 2007)等の言語的手段、トーンの変化(Günthner, 1997)やジェスチャー(McNeill, 1992)等の非言語的手段を活用し、共に協力し合って不平不満の深刻さを訴えている。このことにより両者は、不平不満を正当化するだけでなく、自らのフェイスを守り、かつ両者間の親密さを強固にしている。

これらの調査結果は、ELF 使用者である会話者らが、自らが参加する会話の文脈に適切に様々な言語・非言語的手段を調整することに長けており、そのことにより相互作用における人間関係の維持を巧みに達成していることを示している。

### (4) 結論：教育的示唆、今後の展望・課題

以上、本研究は、既存研究では十分に解明されていなかったELFのコミュニケーションの競争的側面について、その詳細な達成過程を解明することに成功した。会話データ中において、ELF 使用者である会話者らは、自分の第一言語で話していないにも関わらず、本来なら対話者のフェイスを脅かす恐れのある言語行為時においても、様々な言語・非言語的手段を巧みに使用して効果的にコミュニケーションを成し遂げている。これは、グローバル人材に求められる英語の「コミュニケーション能力」がどのようなものであるか

について大きな示唆を与えるものである。つまり、英語のコミュニケーション能力モデルの中核的要素は、英語母語話者のように話すことではなく、本研究が解明したような様々な言語・非言語的手段をその場に適切に使用する動的な意味・人間関係交渉能力が占めると考えられる。

これらの調査結果を考慮すると、英語教育では、単に英語母語話者の「英語」の言語的特徴を学習者に詰め込むのではなく、学習者らが自分の参加する会話の文脈でのコミュニケーションの交渉・相互交流の必要性に応じて、利用可能な言語・非言語的手段を最大限に活用できる能力(Widdowson, 1983, 2003)を育成する必要がある。その履行のためには、(1)授業内外において、学習者がELFのコミュニケーションに参加して交渉や相互交流の目的を達成する機会を多く設けると同時に、(2)ELFのコミュニケーションが様々な言語・非言語的手段を活用して成功裏に達成されている実態に対する教員、言語政策者、教材作成者、及び学習者の意識を高めることが必要である。後者の実施には、ELFのコミュニケーションの実例を提示した上で、その中での相互理解と人間関係の維持・構築のためのコミュニケーション方略の使用を分析、検討する意識向上活動(awareness raising activities)を授業内活動や教員養成課程において取り入れることができる。現在、多くの英語教育が、いわゆる英語母語話者の「英語」、及びそのコミュニケーションを規範として行われ、それに伴い大部分の英語学習者が、「ネイティブのように話せるようになりたい」、「ネイティブ教師から英語を学びたい」と、盲目的な「英語母語話者信仰」に陥っていることを考慮すると、このような活動がもたらす教育効果は大きい。実際、授業でこの活動を取り入れたところ、盲目的な「英語母語話者信仰」からの脱却、英語のコミュニケーション能力に対する学生の意識改革に成功した。今後は、授業内にELFのコミュニケーションの状況を積極的に取り入れる環境を整え、かつELFのコミュニケーションの実態把握に基づく教材を開発・活用して行くことにより、グローバル化に対応した英語のコミュニケーション能力の育成を推進していくことができると考えられる。

一方で、今後の研究課題もある。第一に、本研究では3つのFTAsに焦点を当てたが、ELFのコミュニケーションの実態を把握するには更に多くの種類の言語行為を調査する必要がある。第二に、本研究はELFのコミュニケーションのうち、友人同士の会話を分析したが、不均等な力関係の者同士の会話(例：ビジネスコミュニケーション等)についても今後は調査する必要がある。第三に、人間関係維持の交渉過程について、本研究ではフェイスの交渉について詳細に分析したが、もう一つの要素であるアイデンティティの交渉については、その調査を見送った。こ

の点については、今後、会話分析的手法と民俗学的手法である回顧インタビュー等の技法も用いて調査する必要がある。

以上のような課題が確認されたが、本研究では、会話分析、協調の原理、ポライトネス理論等の語用論の中心をなすコミュニケーション理論をELFのコミュニケーションという現在益々増加傾向にある国際的コミュニケーションの分析に応用し、更に、非言語的手段もその分析に組み入れることで、相互作用の過程を包括的かつ詳細に記述することにより、会話参加者らがこれらを駆使してFTAになりかねない言語行為をいかに効果的に達成しているかの過程を解明することに成功した。また、ELFのコミュニケーションの実態把握に基づき、グローバル人材に求められる英語の「コミュニケーション能力」について検討し、今後の英語教育で取り入れるべき具体的な方法を提案した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 4件)

Konakahara, M. (2015). An analysis overlapping questions in casual ELF conversation: Cooperative or competitive contribution. *Journal of Pragmatics*, 84(0), 37-53. doi: <http://dx.doi.org/10.1016/j.pragma.2015.04.014>, 査読有

Konakahara, M. (2014). Interactionally skillful participation in ELF interactions: A case of floor-attempting overlapping talk.

*Waseda Working Papers in English as a Lingua Franca*, 3, 125-139, 査読有

Konakahara, M. (2013). Overlapping as an active involvement in ELF interactions: Explicitness and efficiency. *Waseda Working Papers in English as a Lingua Franca*, 2, 40-58, 査読有

[学会発表](計 11件)

Konakahara, M. (2015). A reconsideration of communication strategies from the perspective of

English as a lingua franca. Paper presented at the Pragmatics and Language Education Workshop sponsored by JALT Pragmatics SIG & Hiroshima JALT, Aster Plaza, Hiroshima, 2015.03.07.

Konakahara, M. (2014). Overlapping proactively and retroactively: A case of ELF casual conversation. Paper presented at the 7th International Conference of English as a Lingua Franca, DERE- The American College of Greece, Athens, Greece, 2014.09.05.

Konakahara, M. (2014). Skillful participation in ELF interactions: A case of unsuccessful floor-taking overlapping talk. Paper presented at the 3rd Waseda ELF International Workshop, Waseda, Tokyo, 2014.03.01.

Konakahara, M. (2013). Disagreement sequence in ELF interactions: A case of casual conversation. Paper presented at the 6th International Conference of English as a Lingua Franca, Roma Tre University, Rome, Italy, 2013, 09.04.

[図書](計 1件)

Konakahara, M. (in press). The use of unmitigated disagreement in ELF casual conversation: Ensuring mutual understanding by providing correct information (pp. 70-89). In K. Murata (Ed.), *Exploring ELF in Japanese academic and business contexts: Conceptualization, research and pedagogic implications*. Oxon: Routledge.

#### 6. 研究組織

(1) 研究代表者

小中原麻友 (KONAKAHARA, Mayu)  
早稲田大学・教育・総合科学学術院・特別  
研究所員  
研究者番号: 80580703